

自動車の安全を支える交通心理学の先達

日本交通心理学会第2代会長
元日本大学生産工学部 教授 宇留野 藤雄
文学博士



宇留野 藤雄(うの ふじお) 略歴

1917 (大正6) 年4月 27日 茨城県常陸太田市に生れる
1949 (昭和24) 年3月 東京文理科大学心理学科卒業
1949 (昭和24) 年9月 東京工業大学助手 (文部教官)
1959 (昭和34) 年5月 警察庁に outward
1960 (昭和35) 年9月 科学警察研究所交通部 交通安全室長
1969 (昭和44) 年6月 日本大学総合科学研究所教授
1971 (昭和46) 年4月 日本大学生産工学部教授
1981 (昭和56) 年11月 日本大学より文学博士の学位を授与される
(研究テーマ 交通心理学)
1986 (昭和61) 年7月 日本大学生産工学部図書館長
1987 (昭和62) 年4月 日本大学定年退職
1994 (平成6) 年11月 勲四等瑞宝章
1996 (平成8) 年10月 19日 逝去 (享年79歳)

学会活動・社会活動

自昭和24年～至昭和62年 日本心理学会会員
自昭和58年～至平成8年 日本交通心理学会会員・第2代日本交通心理学会会長
自昭和41年～至昭和53年 (社)交通工学研究会理事
自昭和40年～至平成8年 (社)日本交通科学協議会常任理事・顧問
自昭和43年～至平成8年 (財)日本交通安全教育普及協会理事

研究論文

自動車運転行動の安全と教育に関する総合的研究 (共著)
文部科学研究費成果報告 (昭和61年3月) ほか47篇

公共事業体の委託研究報告

高齢運転者対策に関する交通心理学的研究——その教育的アプローチ——
佐川交通社会財団研究助成報告書 (共著) (平成8年3月) ほか19篇

自動車交通の安全を手がけた先駆者

宇留野藤雄氏は我が国の心理学に関する諸研究の中で、「交通心理学」なる領域を創設し、今や交通安全に関する諸施策を考える上で「交通心理学」的な知見を抜きにしては考えられない確固とした学問上の地位を築き上げられた功労者と言っても過言ではなからう。

もちろん、陸上における交通機関の安全運行の研究に関しては、すでに国鉄労働科学研究所がこれを手掛け、その研究実績の数々は周知の事実である。然し、昭和30年代後半より急速に高まって来た「くるま社会」の到来は、マスコミに「交通戦争」なる新造語まで生み出させるに至った。

そもそも「くるま社会」は、自動車運転者・自転車・荷車・歩行者等々、全く通行様態の異なるものが同じ道路を利用し、相互に往き来することによって成立している。その為に交通事故は我々の極く身近かなところでも発生している。これが軌道・鉄道交通や、海・空の運輸とは異った点で、これらに対する対策も決して一筋縄では行かぬ「難かしさ」を抱えている。

「男子の本懐」と文部教官(東工大)より 警察庁技官へ転身

この様に我々の身近かで時と場所を選ばず発生す



新宿でのスナップ写真 (平成5年5月)



ハワイにて (平成2年1月)

る交通事故の多発に対処するため、警察庁は、交通警察の運用の科学化を図ることが急務であることに気付き、科学警察研究所を創設し、当時東京工業大学において学究の道・教育者の道を歩んでいた宇留野藤雄氏に白羽の矢を立て就任を懇請した。

新たな交通部交通安全室長の仕事は、我が国の道路交通の安全確保は勿論、道路利用者(人と車両)への指導取締り等にかかわる極めて重要なものであったが、すべて、未知の領域が多い為、種々の隘路困難も予想された事は想像に難くない。

然し先生は、「この様な重大な仕事を任せられるのは男子の本懐である…」と、敢然とこれを受諾、学問の府から一介の技官に身を投じ、我が国交通警察の科学化に向けて、該博な心理学の知識と持ち前の行動力と実行力、そして広い人脈と魅力的な人柄をもって、様々な課題に取り組み、着々とその成果を上げられた。

道交法65条制定のための飲酒実験

数々の業績の一部は略歴に示される通りであるが、特に道路交通法第65条(酒気帯び運転の禁止)にかかわる「身体に保有するアルコールの量と『酒気帯び』規定の制定(道交法施行令44条3)」に当っては、大がかりかつ精力的な実験研究を行なった。その後道交法の一部改正によって、『酒気帯び』運転に関する罰則が強化され今日に至っているが、ここで得られた基準は、国際的にも初めての基準であり、現在自動車先進国各国の基準として採用されている。

この事例は、「研究し・提案し・行動する学会」を標榜する日本交通心理学会としても、その歴史に記されるべき快挙であり、学会全員の誇りとするところでもある。

かくして、科学警察研究所はもちろん、警察行政の中



日交心の仲間と千鳥が淵で花見(平成5年4月)
左から西山 啓、丸山康則、宇留野先生、木島公昭

で「交通心理学」の存在とその重要性を定着させ、幾多の後進を指導されたが、1969(昭和44)年日本大学総合科学研究所教授、1971(昭和47)年日本大学生産工学部教授に就任、再び学究と教育者の道を歩むことになった。

幼児交通安全教育の基本を構築

昭和46年総理府の「幼児交通安全対策プロジェクト」のリーダーとして、専門家の協力を得て、幼児交通安全教育の基本を制定(国家公安委員会・幼児交通安全教則)し、幼児交通安全クラブの全国的展開など幼児の交通事故の激減に貢献した。

沖縄県交通方法変更時の交通安全教育指導

沖縄県の本土復帰に伴う交通方法の変更は昭和53(1978)年7月30日を期して行なわれた。これは従来米本土方式「車は右」から日本本土並みの「車は左」に改めるもので、これを完了しないと、沖縄の戦後は終わらないとも言われた国家的大プロジェクトであった。変更日が7月30日であったため、ナナ・サン・マルと呼ばれ道路・車両・標識から運転者・歩行者をも含めた官民一体の準備が行なわれた事は言うまでもない。ここにおいて、文部省が主催する幼児・児童の交通安全教育指導チームを率いて自ら沖縄県下各地の交通安全教育の指導にあたった。その後5年経過した時点での調査結果は幼児・児童の交通安全行動に改善効果が認められた。

災害時の運転者の安全行動を解明

また最近、地震等の災害時におけるくるま対策が大きな関心事となりつつあるが、昭和53(1978)年～昭和

56(1981)年まで、「大地震における運転者の意識と行動」を調査分析している。昭和60(1985)年には日本消防協会の協力のもと「日本海中部地震における運転者の意識と行動」について、現地調査を行ない、運転者のとった行動の解明を行ない貴重な提言を行なう等々常にくるま社会の先を見通した研究をリードされたことは敬服に値するものがある。

日本交通心理学会の設立

先生はかねてから交通安全に関する諸問題について、研究討議の出来る組織の設立を構想して居られたが、これを実行に移し、1975(昭和50)年に日本交通心理学研究会(初代会長鶴田正一元大阪大学・中京大学教授)を立ち上げ、その事務局長に就任。1982年には日本交通心理学会に名称も変更し、心理学会における独立した研究領域(学会活動)としての地位の確立に尽力された。

そして鶴田会長のあとを受け、第二代日本交通心理学会会長に就任。1996(平成8)年に病没されるまで学会の発展の基礎を築かれ、「交通心理学の宇留野先生」の名声は更に全国的なものとなったことは、研究業績の大なること、数々のマスコミ・メディア等への登場がこれを証明している。

この間1981年には、永年に亘る交通心理学の研究の集大成を学位論文にまとめられ、日本大学より文学博士の学位を授与された。

著書・研究に見られた交通心理学の千里眼ぶり

論文は、道路・歩行者・交通警察官・運転者・運転行動等の章から構成されているが、特に運転者の適性、問題・事故多発者・運転機能を阻害する要因等にもふれ、



水墨画を楽しむ

新しい知見が展開されている。

著作は数多いが、『危険なドライバー』(朝日新聞社刊・1969年)は、すでにこの分野での達見を展開され、当時の交通問題に関心を抱いていた警察官・実務家・研究者にとってはバイブル的存在として高い評価を得た。そしてこの書物は先生の没後、同書の復刻版発行の要望が強く、筆者(西山)と岸田孝弥 高崎経済大学教授(当時)によって、古い資料の書き替えや解説の加えられた新『危険なドライバー』が誕生した程である。この作業を担当した者として痛感したのは、同書の着眼点や内容ともに全く現代にそのまま通用することばかりで、さすが「交通心理学会の千里眼…」と舌を巻くことばかりであった。

多くの人々に慕われた人柄

先生はアイデアと行動力で広く活躍されたが、持ち前の気遣いと優しさ溢れる人柄で多くの人からも慕われ、宇留野ファンは多かった。その人柄に惚れ込んでいた人がある日「先生は夫婦喧嘩をされたことがありますか」と問うたところ、即座に「ありません」との返事。さもありませんと一層感服し己れの不明を恥じ入ったとの事である。

然し乍らこちこちの「学者先生」ではなく、交通評論家集団の代表幹事でもありまとめ役でもあった。個性派揃いの評論家グループのメンバーも、気さくで人を包み



昭和63年元旦の作品



平成9年10月19日一年祭に発行された記念追悼誌「やあ、頑張ってるね」の表紙

込む温かい人柄で接して来られたのは、はた目にも心温まる思いがした。

奥様は交通評論家として著名な結城多香子さんで、お二人ともゴルフ好きであったから、晩年周囲にゴルフ場の多い伊豆高原に居を移された。そして趣味と仕事を共にされた鴛鴦(おしどり)ぶりも決して半ばではなかった様で、同学・同業・同好の人たちを羨ましがらせる一面もあった。

研究成果を世の中に還元しなくては…

先生は常に「我々は研究し行動し提言出来る学会でなくてはならぬ」と言われた。「単なる研究ではなくその成果を世の中に還元しなくては…」が口ぐせであった。

そんな経緯もあり、日本交通心理学会編のブランド名で、トラックドライバー用安全教育ビデオ教材(全3巻)を制作したり、「安全運転の人間科学(1)(2)(3)、(1982~85)」「安全運転の心理学(1)(2)、(1988)」「人と車QアンドA(1993)」——いずれも(株)企業開発センターより発行——などを刊行し、成果を世に問うている。

「やあ頑張ってるね」ハイ「みんな頑張っています」

先生が亡くなられ10周年の平成17年11月11日に、「宇留野先生を偲ぶ会」が催された。発起人の代表は元人事院総裁の内海倫(ひとし)氏で「科学警察研究所交通安全室長宇留野藤雄」の生みの親とも言うべき方をはじめ、学者・実務家・弁護士・会社社長・評論家・音楽家等、錚々たる顔ぶれ多数の参加者によって和やかに楽しく行なわれた。その時に配布されたのは、奥様の発案で作られた「宇留野藤雄追悼文集」でタイトルは「あれから十年みんな頑張っています」である。これぞ先生の口ぐせ「やあ頑張ってるね…」に応えた「偲ぶ会」メンバーの苦心の作! そしてあちこちにお得意の水墨画や、スナップ写真もちりばめてある傑作であった。

その末尾には、奥様のお礼の言葉「…宇留野が残してくれた宝物、“素敵なお友だち”達に囲まれ、今日を出発点に又これからの人生を歩んで行きます。今日の会を彼もきっと喜んでいると思います…」が付記されていることを紹介して顕彰文のしめくりにしたい。

(広島大学名誉教授・前日本交通心理学会会長

文学博士 西山 啓)